ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第112号 2024年4月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 京都市学校歴史博物館企画展「潜入！学校文化の舞台裏」を見学して	八田 友和	2
体験的文献紹介(61) －兵庫教育大学教授に招聘される－	神辺 靖光	6
大東文化学園理事長金子昇による理事会・評議員会での講演 －私学は経営機構を強化し、教育戦略を確立すべし（1977年）－	谷本 宗生	10
大正時代の女子高等教育（67） －西日本最大最善の女子大学をめざした神戸女学院－	長本 裕子	12
進学案内書にみる戦前期東京の予備校（1）：はじめに	吉野 剛弘	18
旧制灘中学の教育目標と生徒の活動（8）	冨岡 勝	21
刊行要項（2015年6月15日現在）		25
短評・文献紹介		26
会員消息		26

コラム

京都市学校歴史博物館企画展「潜入！学校文化の舞台裏」を見学して

八田 友和（はった ともかず）

(クラーク記念国際高等学校)

はじめに

2024 年 2 月 6 日（火）、京都市学校歴史博物館（以下、「学校歴博」と表記する）を訪問し、開館 25 周年記念企画展「潜入！学校文化の舞台裏～学校文化の歴史百科～」（以下、「企画展」と表記する）を見学した。本稿では、企画展を見学した雑感をまとめる。

2. 企画展の概要

ここでは、企画展の概要を整理する。

1. 名　称：「潜入！学校文化の舞台裏～学校文化の歴史百科～」
2. 会　期：2023 年 12 月 23 日（土）～2024 年 3 月 28 日（木）
3. 場　所：京都市学校歴史博物館
4. 入館料：大人 400 円、小・中・高校生 150 円

※ 京都市内の小・中学生は土・日曜日入館無料

企画展の趣旨・概要を、広報チラシから抜粋する。

私たち現代人の人生にとって、重要な舞台であり続ける場所、「学校」。この場所で私たちが何気なく行ってきたこと、さらには行事などの諸活動、加えてそれとはなしに従っていたルールなどなど、いわゆる「学校文化」と呼ばれるモノやコトの数々は、実は歴史のなかで徐々につくりあげられ、現在まで引き継がれてきたものばかりです。「なぜ夏休みに宿題があるの？」。「思い出深いあの給食のメニューはいつ登場したの？」。「そもそもなぜ校則が制定されるようになったの？」。この企画展では、こうした学校の文化の誕生や普及の歴史、つまり「舞台裏」に潜入し、学校文化をめぐる数々の謎に迫ります。
（出典）「潜入！学校文化の舞台裏」展のチラシより引用

また関連イベントとして、2024 年 3 月 16 日（土）に講演会「京都市の小学校文化の歴史 調査報告会ー学校空間・行事・学びの文化ー」（講師：林潤平、会場：京都市学校歴史博物館）が企画されている。詳細は、学校歴博のサイトをご覧いただきたい。

3. 企画展を見学した雑感

私自身、企画展を見学して「大変考えさせられた」というのが率直な感想である。

本展覧会の特徴として、「そもそも」「なぜ？」の視点から学校文化の舞台裏に迫っている点が挙げられる。例えば、「なぜ校舎は四角四面で、同じような形のものが多いのか？」「家庭訪問はなぜ行われるようになったのか？」といった質問が取り上げられていた。まさに痒い所に手が届くテーマ設定ばかりで、筆者自身「そういえばなんでだろう」と思い、何度も立ち止まって考えこんでしまった。

一方で、現在・未来について言及していないことが、私たちに想像の余地を残してくれていると感じた。「なぜ、〇〇なのか？」という疑問に対して、「そもそも〇〇だった…」と資料や文献などにもとづいたある種の回答や考えがまとめられているものの、「それを踏まえて現在はどうあるべきなのか？」「これからは（将来・未来は）どうあるべきなのか？」については言及されておらず、来館者に考えるヒントを与えてくれている展示だと感じた。その意味で、児童生徒、教職員がどの程度（回数・人数）、企画展を見学したのか、どのような感想を抱いたのか非常に関心がある。

4. 企画展を見学した際の疑問

企画展を見学するなかで、いくつか疑問が湧いてきた。やや乱暴に書いてしまうと、「そもそも学校文化は継承しなければならないものなのか…」という疑問である。学校文化は、継承される「べきもの」という立場で語られることが多い。これ

は、学校文化に限らず、過去から受け継がれてきた伝統や文化は後世に残していく「べきもの」であり、大切なものである…という言説が多数派ではないだろうか。筆者自身も概ねそのように捉えている。

一方で、時代や社会情勢の変化を受け、学校文化に対する社会の受け止め方や児童生徒の感覚が乖離している部分もあるだろう。それを象徴するものが、「校則問題」ではないだろうか。「学校文化」として残ってきた考えや校則、暗黙のルールと、現代社会や児童生徒の感覚が合っていないことが「校則問題（ブラック校則の見直しなど）」や「理不尽な指導の見直し」として表出しているように感じる。

また、SNS の発達に伴い、自校だけでなく、他校の雰囲気や出来事も簡単に知ることができる時代になっている。スマートフォン１つあれば、自校と他校の文化を比較することがものの数分でできてしまう。他校の文化を知ると、これまで「当たり前」だと思っていたことが「当たり前」ではないことを思い知らされる時もあるだろう。その瞬間、「なぜ？」という疑問が浮かぶ。

筆者の体験談を紹介し考えてみたい。筆者は兵庫県姫路市で生まれ育ち、小学校から高等学校まで「日番」文化で育ってきた。しかし、大学進学を機に他県に移ってからは、「日番」では通じず、「日直」と言い換えなければならないことを知った。その後、「日番」は兵庫県の特定の地域だけで使用されている表現であることを知った。ではこの場合、「日番」が生まれた舞台裏を知ったうえで、この文化を愚直に守っていくことが正しいのだろうか。それとも「日番」の使用をやめ、全国的にスタンダードな表現である「日直」に表現を変えることが正しいのだろうか。もし変更することになった場合、誰にコンセンサスを得るべきなのだろうか。使用をやめることになると、地域住民や卒業生、研究者など、様々な関係者から「なんで？どうして？」「伝統が失われる」「文化は守っていくべきだ」「〇〇という歴史・意味合いがあるのに…」といった声が聞こえてきそうである（筆者もそのような声をあげる一人であろう）。

ここでまた一つ疑問が生じる。それは「学校は誰のものか」という疑問である。展覧会のチラシにもあったように、学校は「私たち現代人の人生にとって重要な場所」であり続けている。だからこそ、「学校＝在籍している児童生徒・教職員のもの」とは言い切れない実態が存在している。少子化に伴う学校の統廃合や地域学校協働活動の推進など、学校を取り巻く環境が複雑化するなか「学校は誰のものか」という大きな「？」に向き合う必要があると感じている。

5. さいごに

本稿では、学校歴博が行った企画展を取り上げ、取り留めのない雑感を述べてきた。コロナ禍における一斉休校やオンライン授業の実施を受け、「そもそも学校は必要か」「学校は何をするところなのか」という純粋な疑問が学校に突き付けられた。コロナ禍を経た現在も、その眼差しは教育関係者に向けられているだろう。企画展で扱われていた「学校文化」を考えることは、これらの問題に向き合うことに繋がると感じた。

企画展は、学校に関する様々なトピック（家庭訪問、学級会、校則、夏休みの宿題など）を取り上げ学校文化の舞台裏に迫っていた。このように学校文化に関するトピックを可能な限り取り上げ、個々の文化やその集合体から学校文化の全体像を明らかにしていくことは非常に重要な意味をもつだろう。しかし、そこで止まってはいけない。そのうえで、「自分たちの学校ではどうか」「これからどうしていくべきか」…など、考察・討論を行う土俵を自分たちの学校の中に作っていくことが大切になるだろう。今後の学校の在り方を「これまでの学校文化」を踏まえながら模索していくことが求められている。

【参考文献】

・京都市学校歴史博物館ホームページ（2024 年 2 月 12 日確認）
http://kyo-gakurehaku.jp/

体験的文献紹介(61)

ー 兵庫教育大学教授に招聘される ー

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

昭和60（1985）年6月のある日のこと、兵庫教育大学副学長の上寺久雄という人から突然、電話があって、私（神辺）を当大学の教授に招聘したいので至急会いたい、ついては某日、東京の某大学で教育方法学会があり、そこで講演するから聴いて貰いたい。それから君と懇談したいということである。人を招聘するにしては無鉄砲なやり方で礼を欠いた気もしないではなかったが、明るい率直な気持ちが伝わってきたので指定された大学を尋ね、上寺氏と懇談した。兵庫教育大学は文部省発案の新構想大学で、全国の小中学・高校の中堅幹部教員を集めて校長・教頭に仕立てる任務を持つ。同時にできた上越教育大学、鳴門教育大学も同系列の大学だが兵庫教育大学が中核校である。教育心理、言語、社会、理数、体育、芸術の6学科があるが、教育心理学科が中核である。しかるにその中核学科の中核たる日本教育史の専任教授が開学以来、空席になっている。それで貴君を招聘したいと言うのである。ありがたい名誉な話であるが、なぜ私の名を知ったのかと問うたところ、教育史学会の紀要の毎年の研究業績表で神辺の名を探し当てたと言うことであった。当時、教育史学会紀要は毎年、会員の研究業績を自己登録させて一覧表にしていた。私も登録を重ねたが、頼まれればどこの紀要にも書きまくっていたから数の上では多作の研究者と見られたろう。さらに上寺氏はこんなことを述べた。〝わが大学は中国からの留学生が多いが、最近、上記の論文一覧表をみて神辺の指導を受けたいという学生が居る〟とのこと。私はびっくり仰天した。そこまで言ってくれるなら兵庫教育大学の招聘を受けないわけにはいかない。上寺氏に身柄をあずけることにした。

早速、兵庫県加東郡社町にある兵庫教育大学を尋ねた。広々とした小高い丘に建てられた幾棟かの研究棟は理想的な大学院大学のように思えた。谷口澄

夫学長や幹部教授の何人かと懇談した。大学側は私に教育基礎講座（教育心理学科のこと）の主任教授のつもりできてほしいという。目下、年配の教育心理学の教授がいるから、しばらく神辺を主任教授並（なみ）として置きたいと言うことであろう。承知した。私の方からは週一回の早稲田大学の日本教育史の講義を許してほしい。目下の自分の研究に必要な資史料が早稲田の図書館にある。貴重な資史料が管理されている書庫に自由に入れる資格を保持するために非常勤講師でいたいと訴えたのである。上寺副学長の答えは〝そこはそこじゃよ〟という暗示に富んだものであった。原則的には違法だが、黙認されているということであろう。面白い爺さんだと心を開いた。黙認どころか、数ヶ月後には上寺氏から姫路市にある私学姫路独協大学の日本教育史講義を依頼されたのである。

こうして翌年の昭和61年4月から兵庫教育大学に移籍するつもりで国士舘文学部の幹部諸氏の了解をとりつけたり、教育学科の盟友たちにも別れをつげた。しかるにその年の暮になって突然、兵庫教育大学のもう一人の副学長という人物が、文学部長室に現われ、神辺を翌年1月から兵教大の教授にするという強（こわ）談判を始めたのである。日本教育史担当の教授を欠いた教育学科は当初から文部省の認めぬ所らしかった。そこで、この官僚的な副学長は61年1月からの神辺の就任を執拗に迫るのである。窮した私は電話で上寺副学長に相談すると上寺氏は例の調子で、当学は三学期制で3月まであるが、実際は1月から3月までは入学試験、その他で授業は何回もない。一、二回ほど本学に来て授業して貰えば何とかなるとのこと。長年、教務の仕事をやってきた私は事態をのみ込んで毎週2日、兵教大に飛んで教育史の授業をやり、残る4日は東京に帰って授業・試験・採点その他の業務を終了させる日程をつくった。文字通り、東海道新幹線の東京・神戸間と全日空羽田・大阪空港往復の激しい毎日であったが、3月末までに国士舘大の倫理教育学科と兵教大教育基礎講座の授業と試験・採点まで完全に終了させたのである。

61年4月から本格的に兵庫教育大学の授業がはじまった。私に用意された授業は以下の通りである。

学校教育学部…①日本教育史講義、②教育基礎論演習（卒業論文作成指導を兼ねる）。

大学院…③人間の成長と教育の理念、④日本教育思想史研究講義、⑤日本教育思想史演習（修士論文作成指導）。

①学部の「日本教育史」はこれまで各大学でやってきた近世の藩校・私塾・寺子屋と近代の学校発達史を軸に講述する。②演習は学生各自の出身学校の創立の経緯を調べさせた。③「人間の成長と教育の理念」は私の本学就任以前から組まれていたもので、授業の前半を教育心理学の教授が担当し、後半を教育史の教授が担当するもので重要視されたがその意義はわからない。私は明治の「学制」の理念、教育勅語体制と諸学校令体制、大正自由教育、戦時教育体制の意義及び教育基本法体制を講義した。④の日本教育思想史研究は朱子学がどうの、陽明学はどうの、教育勅語はどうのと説明しても陳腐と思ったから幕末から明治前期にかけてつくられた各地方の学校が独自性を持ったことを調査しながら講述したのである。

新学年度がはじまると同時に谷口学長、上寺副学長の定年退官の送別会がおこなわれた。谷口学長は岡山県の閑谷（しずたに）学校について造詣（ぞうけい）が深い学者だからお話をききたかった。淡々としたお別れであった。上寺副学長の送別会は異様で近隣の私学の学長や校長らも顔を見せ、本学の教員も勢揃いする盛大な会合であった。〝間もなくはじまる学長選挙の前哨戦だ〟と同僚の助教授が教えてくれたので、いささか驚いた。学長選挙などということは私にとってはじめての経験だったからである。

立候補などということはなかった。投票日の二、三日前に大学の掲示板に候補者名が張り出された。上寺久雄氏と例の官僚的な規則一点張りの副学長である。両者の略歴を記そう。上寺氏は広島の師範学校を卒業してからどういうわけか東京の私学・玉川学園で教鞭（きょうべん）をとり、戦後、大阪府に移って教育行政畠を歩んでから兵教大の副学長になったと言う。対する官僚的な元副学長は東京文理科大学の教育学科を卒業してから、旧師範学校で教え、兵教大に着任したとい

う。多少、学究的なところがあって西洋や日本の著名な教育学者や教育家の話をするが、われわれにとって常識以上のなにものでもなかった。これに対し、上寺氏は私にとっては破天荒な人で計り知れないところがあった。学究の徒ではない。苦労を重ねた市井のおっさんのような所があって時折りど肝(ぎも)を抜かれることがある。大学教授は本来、研究者だから理屈っぽいが、行動は鈍(にぶ)い、この鈍い教授たちを新構想大学で働かせるには上寺氏のように世俗的な苦労人の方がよいと判断したので上寺氏に一票を投じることにした。

新構想大学は確かに斬新なところがあって明治以来、作り上げられてきた学校を相手にしながら、その旧弊を直そうとしたり、破壊して作り直そうとするが、その企画が曖昧である。例えば兵教大の基本学科とされる教育学科は教育基礎講座、教育経営講座、生徒指導講座、教育方法講座の4講座を擁(よう)し、それぞれに教育学、心理学の教授・助教授が配されているが、教授・助教授らはそれぞれ自己独特の研究をし授業をしている。教育学科として有機的な組織構造になっているとは思えない。因みに教授らの出身大学をみると約50%が広島大学、40%が京都大学で、残りの10%が全国の国立私立大学出身者である。いまだ創立3年目であるから、これからの充実を期せばよいと思った。

教育学科だけのつきあいだが、彼らは酒の飲み会が大好きであった。自動車を使えば3，40分で神戸、姫路、大阪に行かれるが陸の孤島のような田舎町にある大学だから娯楽がない。勢い夕暮ともなれば一升瓶片手に飲み会に行く。近くに灘(なだ)の生(き)一本の醸造所もある。兵教大ができてから町には酒屋や飲み屋が沢山できたと言うし、大学の自前の会合部屋をつくっている。その点、至れり尽くせりの感があった。

私は当年、57歳、そろそろ老年とされる年頃だから上席に座らせられる。若い教授や助教授が酒をつぎにきては雑談する。選挙状況を聞いたり話しこんだりする者もあったが、楽しい飲み会であった。

学長選挙は上寺氏の圧勝に終り、8年に及ぶ上寺学長時代がはじまった。

参考文献　特になし。強いて言えば私の日記手帳。

大東文化学園理事長金子昇による理事会・評議員会での講演

― 私学は経営機構を強化し、教育戦略を確立すべし（1977年）―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

今回は、一九七七（昭和五二）年三月末の大東文化学園の理事会・評議員会（合同）で、当時の理事長（第五代）を務めた金子昇が行った、講演「私学は経営機構を強化し、教育戦略を確立すべし」について興味深い資料ゆえ、ぜひ要約紹介しておきたいと思う。全体は、分量的には十項目からなる二千字以上に及ぶもので、題目に明示されているとおり、私学固有な教育的使命について強調されている内容となっている。以下、幾つかの項目内容を抜粋紹介したい。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

「一、現在、多くの私学は莫大な借金を背負い込み、その経営はいよいよ困難となり、理事、管理者はその解決に狂奔しているありさまである。中には崩壊寸前のところもあり、自転車操業方法でやり繰りしているところが次第に増大している。それは、一般の企業にも似ているが、現在、企業は月間千五〇〇件ないし千六〇〇件という倒産が発生しているし、日本の私立学校も国家の財政危機の推移にしたがって、小規模の大学から逐次倒産して行くのではないか。二、私学は国立と違い、特徴、すなわち建学の精神と目的が確立して行われなければならない。この精神が失われた時、すでにその私学は存在価値がないわけである。また、大学は学問研究の場であり、若い青年を立派に育成する教育の場であるが、同時に現代社会の欠陥や矛盾を指摘し、克服して次の時代を啓発する行動を示す使命を持っている。つまり、社会の正しい建設者たるの自覚が必要であって、単なる学校屋であるならば、害こそあれ、なんら国家、社会に益するものでない。三、教職員についても、同様のことがいえるのであって、建学の理念のもとに、青年教育に命をかける決意と、高く且つ深い学問研究がなければ、それは単なるサラリーマンであって、教育者とはいえない。

教育者とは、教え且つ育てるものであって、自らが高い人格と深い学問がなければ、できないことである。［略］八、これから後、私学は如何にしても保持し、発展して行くか、その防衛は容易なことではない。ただ一ついえることは、“守ることより攻めに転ずる知恵が必要である”ということである。企業でも、最近、経営力の再認識と高揚について、しばしば論議されているが、結局、経営者の首脳陣の資質にあることが指摘されており、不況長期化の打撃が大きい中小企業の分野では、とくに経営者の資質と実力が端的に業績格差となっていることが判明した。昭和四九年無配に転落した某会社が、同五一年度経常利益率において、一一・七パーセントの驚異的発展を遂げた例があるが、その原因は、経営者の必死の信念と斬新な戦略と敏速に世の変化に対応する組織と社員の団結にあったという。九、私立学校も良い意味での企業である以上、そうした会社経営の方法を研究する必要があると思う。とくに、石油ショック以来、一般企業はまず戦略転換を行うとともに人事を整理し、徹底した緊縮策を講じ、一方では大胆な新製品の製作を開発し、強引にこれを実施した。ところが、優柔不断で“守る”ことのみを主眼とした会社は結局崩壊していった。私立学校の経営も同じではなかろうか。一〇、この後、日本の前途はどのようになるかというと、おそらく世界各国からの圧迫と侵害が発生し、経済的な不振は政治不安となり、ちょうど大正末期の沈滞した時代に追い込まれる公算が多い。歴史は繰り返すというが、沈滞時代の次に起こる問題は、昭和史に明らかな通りである。日本は二度と失敗をせぬよう、現在ただ今から準備しておかねばならぬ。その基本は何といっても“人”であり、その“人”は教育によって育成する以外にない。前進しなければ後退する以外に方法はないのである。各人各様、意見はあろうが、分裂は破壊に通じ、団結は建設に過ぎるという“理”をよく弁え、ともかく前進することである」

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

緊縮財政を前提としながらも、必要に応じて大胆な私学固有な教育・研究上の施策を企画実践していくべきだ・・と強調している。単なる学校屋などでないと。

大正時代の女子高等教育（67）

西日本最大最善の女子大学をめざした神戸女学院

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

神戸女学院大学は、明治8年10月、米国伝道会から派遣されたE.タルカット女史とJ.E.ダッドレー女史が、神戸山本通5丁目（現神戸市中央区山本通4丁目）で女子の寄宿学校「女学校（おんながっこう）」を開始したことに始まる。関西最古のミッション・スクールである。12年に5年制課程の中等教育のカリキュラムを整備し、24年には3年制の高等科を設け、女子の高等教育を開始した。逆風の中で、27年、「神戸女学院―Kobe College」として女子高等教育機関となる。42年には「専門学校令」による神戸女学院専門部（4年制）として認定され、大正8年、日本女子大学校、東京女子大学に次いで、専門部を「大学部」と名乗ることが許可された。はやくも明治中期に、アメリカのカレッジレベルの女子高等教育を始めていたのである。そのいきさつを概略しよう。

明治2年11月、米国伝道会から派遣されたD.C.グリーン夫妻が横浜に到着し、翌年3月、神戸で布教活動を始めた。当時神戸は港湾設備や居留地の建設が盛んに行われ、多くの労働者が入り込み、「ソドムの町」のようであったという。市中には明治政府により「切支丹禁制」の高札が掲げられていた。しかし、在留外国人のためのキリスト教活動は禁制の対象ではなかったので、夫妻はまず在留外国人のための教会を作ろうと計画した。グリーンの要請に応えて、4年3月から5年にかけて派遣されてきたO.H.ギューリック、J.D.ディヴィス、J.C.ベリーらと教会設立運動を行った。これが後に神戸教会となる。これら宣教師のもとに海外の文明を吸収しようと10名ほどの青年たちが集まってきた。青年たちは英語を学ぶかたわら、グリーンから聖書の講義を受けていた。5年12月、青年たちの有志がお金を出し合って宇治野に一軒の家を借り、学校を設立した。これが宇治野英語学校で、神戸女学院と同志社の共通の祖となる。

神戸女学院の前身――「女学校」開校、初代校長はE.タルカット

明治6年2月、切支丹禁制の高札が撤去された。その1カ月後に来日したタルカットとダッドレーは、宇治野英語学校で協力していたが、生徒が増えたため、同年10月独立して、花隈村の旧三田藩士前田兵蔵方で私塾を開き、男女児に聖書・英語・唱歌等を教えた。翌7年4月、北長狭の白洲退蔵の持ち家に教室を移した。生徒は8歳の幼女から30歳を超える既婚女性まで広い年齢層にまたがり、24～30名くらいであった。この中に九鬼隆義夫人とその娘がいた。米国伝道会は、この「女学校」の順調な発展を見極めた上、神戸に伝道者養成のための女子の寄宿学校「boarding school」を開校することを決議した。

設立に際して、日本人として最大の経済的援助を行ったのは、旧三田藩最後の藩主であり、一時三田藩知事も務めた九鬼隆義であった。九鬼は西欧文明に深い関心を持ち、旧三田藩の重臣であった白洲退蔵らと貿易商社を設立して成功し、神戸港周辺の都市開発に多大な貢献をした。九鬼夫人に招かれて三田を訪ねたダッドレーは、三田を離れるときには土地の少女たちに泣かれるほどに慕われた。そして三田の母親たちが自分たちにはできない教育を、娘たちにしてほしいと、子女を神戸の学校で学ばせることを要望し、校舎建築のために800ドル（当時の800円相当）を寄贈した。

明治8年10月、西洋風木造2階建、ベランダつき延べ152坪の建物で、「女学校」が開始された。寄宿生3名、通学生23名であった。タルカットが初代校長となり、ダッドレーは寄宿舎関係の仕事と、兵庫地区の伝道を受け持った。宣教師団の間では

明治 8 年の女学校校舎
『神戸女学院の 125 年』より

「神戸ホーム」の愛称で親しまれた。午前は国史漢籍、午後は英語・唱歌、万国史、西洋の諸科学を英語で学習したようだ。

翌9年2月、米国伝道会から指名され、ダッドレーの従妹バロウズ女史が着任し、校務を手伝った。同年10月には、寄宿生22名とほぼ同数の通学生が在学し、すでに校舎は入学希望者を全員収容することができなくなっていた。11年2月、日本人側、米国、在留外国人の三方面からの出資を仰いで、新校舎が完成した。木造2階建、延べ約140坪の西洋風建物、正面2階にはベランダが設けられた。同月7日、授業が公開された。能力別授業や英語で万国史の授業が行われる等、当時としてはかなり進んだ教育がなされていたことが伺える。

V.A.クラークソン第二代校長となる、「英和女学校」と改称

10年11月、米国伝道会から派遣された26歳のV.A.クラークソンが着任した。クラークソンは、米国の女子教育機関の名門マウント・ホリヨーク・セミナリー出身で、師範学校でも学び、教職経験があった。クラークソンは、米国で経験した学校管理や教育方法と「女学校」の現状とがかけ離れていて、同意できず、ひそかに改革を考えていた。そしてついにタルカットとトラブルを起こしてしまう。12年夏ごろまでに学校経営の全権がクラークソンに委ねられ、タルカット、ダッドレー、バロウズの3人は、授業を手伝いながら、神戸、兵庫、近辺の地域で伝道し、女性のための特別な任務に就くようになっていた。

12年2月、クラークソンが第二代校長に就任し、改革が始まる。同年9月ごろに、校名が「英和女学校」と改称された。13年、公立学校が普及し、4年の小学校教育が義務教育となった。同年3月、学科課程の改革案を表明し、4年の義務教育を卒業した者に5年の教育を課す本科を設置した。

13年4月から、この改革に日本人男性教師吉田作彌が協力した。吉田は「熊本バンド」から同志社に入学し、卒業したキリスト教信徒で伝道にも燃えていた。翌年、漢学に造詣の深い旧明石藩士山内松鶴が着任した。山内は生涯をこの

学校に捧げることになる。クラークソンは新構想準備として、米国伝道会に申請して図書や諸設備の充実を図った。

13年9月、生徒の学力により、3学年に分けた。最上級生を5年制コースの4年生とし、1年生は入学する新入生のクラスとした。この時の最上級生が2年後に、第1回卒業生となる。国語・漢文のほか、英語で代数・英文法・植物学・英作文・地理・歴史が講じられた。最上級生にはクラークソン自ら科学と幾何学を講じた。宗教教育は全生徒を上級生・下級生に分けて、聖書を日本語で教えた。その他軽体操、行進、図画、声楽、オルガン、裁縫などが行われた。こうして中等教育のカリキュラムが整備された。

クラークソンは、日本女性に対する高度の知的教育を構想し、自然科学教育に力を注いだ。しかし、そのために経費が増大し、米国伝道会本部からもキリスト教教育という至上目的に心を留めるようにと批判があった。しかし、クラークソンは、宗教教育は、学校教育を通じて行われるべきであるという考えを持っていた。

特にクラークソンを悩ませたのは時間とお金の不足であった。物価は上がるが、月謝は上げたくない。開校当時1ドルが1円であったが、60銭程度になって、ドルでの援助金や宣教師たちの給与が目減りしていた。いつもお金のやり繰りをしていた。14年1、2月の報告では、寮母なしで、新しい台所で、4人の上級生がクラークソンを助けて、昼食や夕食作りを行っている。新設された予備科は幼い通学生を対象に設けられたが、実際には大部分が入寮希望であった。そのためクラークソンは母親代わりもした。上級生が下級生の授業を担当した。吉田作彌は、英語に卓越しており、クラークソンの良き助手を務めた。クラークソンはイザヤ書・物理・植物学を教え、舎監と会計と校長の務めを一手に引き受けていた。

このような状況が続いたため、14年の春、クラークソンは、とうとう手足の不自由を覚え、頭脳も働かなくなった。学校財政の悪化に対する心配事が、クラークソンの傷つきやすい神経を侵した。京都や札幌で静養している間、吉田が代行し、13年秋から神戸を去って、兵庫・明石・三田など近辺の伝道に勤しんでいたダッドレーが、夜だけ寮に泊まりに来て助けた。クラークソンは、翌年に予定されてい

る最初の卒業式に出たい希望が強く、回復したとして14年9月復帰した。しかし同年12月、ただ一人の血縁者である祖父の死が伝えられると再び悪化し、帰国せざるをえなくなった。15年1月末、休暇で帰国するダッドレーが同行し、ヨーロッパ経由で帰国した。

英和女学校第1回卒業式

クラークソンとトラブルになり、13年秋から神戸を離れて、岡山で伝道事業に専念していたタルカットが、岡山から呼ばれ、妹のマリア・タルカットを伴い、校長代理として来任した。15年12月22日、クラークソンの学科課程計画で学んだ生徒の第1回卒業式が行われた。本来は6月の予定であったが、吉田作彌の哲学の授業に深い感銘を受けた生徒たちの懇願により、授業が完結するまで卒業が延期されたのであった。12名の卒業生は一人ずつ、参会者の前で卒業論文を朗読し、参会者一堂に深い印象を与えた。最年長者は27歳、最年少者は15歳、最も長く在籍した者は8年を越えた。12名中11名が受洗者であった。大部分は学校に残り、翌年3月まで勉学を続けた。

1期生の平田とし（旧姓宮川敏、マルタ・ギューリック）は、母校の教師となり、英語と歴史を教えた。その後米国のマウント・ホリヨーク・セミナリー（1893年よりカレッジ）に留学し、後に文部省英語中等教員検定試験の我が国最初の女子合格者となった。また、甲賀ふじは、母校の舎監を務めていたが、米国留学し、ケンブリッジやボストンの保母養成所などで研修した。帰国後、神戸の頌栄幼稚園や広島英和女学校幼稚園などで務めた。再び渡米して研修を重ね、帰国後、日本女子大学校附属豊明幼稚園に勤務するなど、幼児教育における先駆的、国際的活動を続けた。渡邊常は母校で助教を続けながら、明治18年に設置された高等科で学び、さらに米国カールトン・カレッジへ留学。帰国後、母校で数学・理科を教えた。このように1期生の中には、教師となってさまざまな学校で活躍した者が9名、また、牧師夫人となって伝道の傍ら教育、矯風会運動、開拓事業な

どで活躍した者が7名いた。特に草創期の生徒たちは、女性宣教師らの影響を強く受けたといえよう。

この卒業式直前の11月に来日したE.M.ブラウン女史が、卒業式後、タルカットのあとを受けて第三代校長となる。

参考文献

『神戸女学院五十年史』

『神戸女学院百年史』総説

『神戸女学院の125年』（1875～2000）

『神戸女学院のものがたり』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校（1）：はじめに

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号からは、進学案内書に掲載されていた予備校の情報を通して、戦前期の東京府の予備校の一端を解明していくことにする。戦前期の予備校の端緒をいつと定めるかという問題もあるのだが、明治前期に予備校と見なされていたもののほとんどは明治 20 年代に中学校に移行していく点を勘案して、ここでは明治 30 年代以降のものを扱っていくことにする。

予備校を制度的な保証のもとに設置するには、各種学校の形で設置するしかない。そのため、学校としての予備校の設置にあたっては、道府県に申請が必要になる。筆者は 20 年近く前に東京都公文書館に所蔵されている予備校関係の文書を収集したことがある。その際に気付かされたのは、設置の申請書類は多く残されている一方で、廃止の申請が非常に少ないということであった。明らかに廃止されていることが分かっている予備校ですら、その廃止の申請書類がないことがあった。文書が散逸したのかもしれないが、現状ではある予備校がいつ廃止されたのかが不分明ということが少なくないのである。

では、予備校の存廃をどのように確定していくかということになるが、そうしたときに一つの有力な史料群として考えられるのが、進学案内書である。受験生に向けてさまざまな情報を発信した進学案内書では、予備校に関する情報も掲載されることがあった。その多くは学校案内ということで、学校名や所在地、どのような課程を設置しているかが示されている。これらの情報を重ね合わせることで、戦前期の予備校の実態の一部を解明できるのではないかというのが、今号からの試みである。

もちろん進学案内書を史料とすることに難点はある。まずもって、すべての予備校を網羅している保証はない。ある進学案内書に掲載されていないからその予備校がないということを意味しないということである。

逆の問題もある。端的に言って、当時の進学案内書の情報は、かなり杜撰なところがあり、情報がアップデートされていない場合がある。以下に示すのは、『昭和八年度版 標準東都学校案内 男子部』（春陽社，1933）の「第九章 予備学校編」の目次である。

第九章 予備学校編 …253
駿台高等予備校 …253
正則予備学校 …254
東亜高等予備校 …255
早稲田高等予備校 …255
神田高等予備校 …256
向上学館 …257
開成予備学校 …258
専修大学附属高等予備校 …258
大日本国民中学会高等予備学校…258
新宿高等予備校 …259
研数学館 …260

ここに掲載されているもののうち、専修大学附属高等予備校は、すでにこのときには廃止されていることは、東京府に提出した廃止申請で確認できる。しかしながら、何事もないかのようにここには掲載されている。

また、この目次を見ると、その多くは高等学校、大学予科、専門学校への入学のための予備校という印象がある。一方で、間違ってはいないものの、高等学校とそれとほぼ同等の学校への入学準備が主たる事業であることが疑問に思えるものも掲載されている。「予備学校編」なので、高等学校とそれとほぼ同等の学校以外のための予備校でも問題はないのだが、分類の仕方次第でどこにどのように掲載されるかというのは、進学案内書によって異なるのである。

また、明治後期から大正期くらいまでは、英語学校が予備校として活用された実態もある。予備校とは別の箇所に掲載されている可能性があるということだが、そうなるとどこまでを調査の対象とするのかという問題もある。

このような難点はあるものの、複数のものを重ね合わせることで、戦前期の予備校の存廃状況の一端は明らかになるであろう。いわば状況証拠を積み上げる作業を行うということなのだが、もちろん進学案内書のみですべてを確定させることはできない。進学案内書の内容を検討し、それを受けてさらに調査を進める必要があるのであって、いわば基礎調査のための予備調査というべき試みである。

明治期から昭和戦前期に至るまでの進学案内書の全貌は、菅原亮芳が『近代日本における学校選択情報―雑誌メディアは何を伝えたか』（学文社，2013）で明らかにしている。また、これらの進学案内書の一部は、近代日本青年期教育叢書の第 5 期として復刻されているものもある。これらのうちから、学校案内が掲載されているものを選び、そこに示されている予備校の情報を拾い上げていくことにする。

すでに述べたように、予備校というのは何かの予備のための教育機関であるから、何の予備なのかはその機関によって異なる。本連載では、戦後の予備校との連続性を勘案して、高等学校、大学予科、専門学校への入学のための予備校に限定して進めていくことにする。

また、予備校は全国に存在しているが、東京府に圧倒的に多い。そこで、まずは東京府に存在した予備校ということに限定して進めていくことにする。

旧制灘中学の教育目標と生徒の活動（8）

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

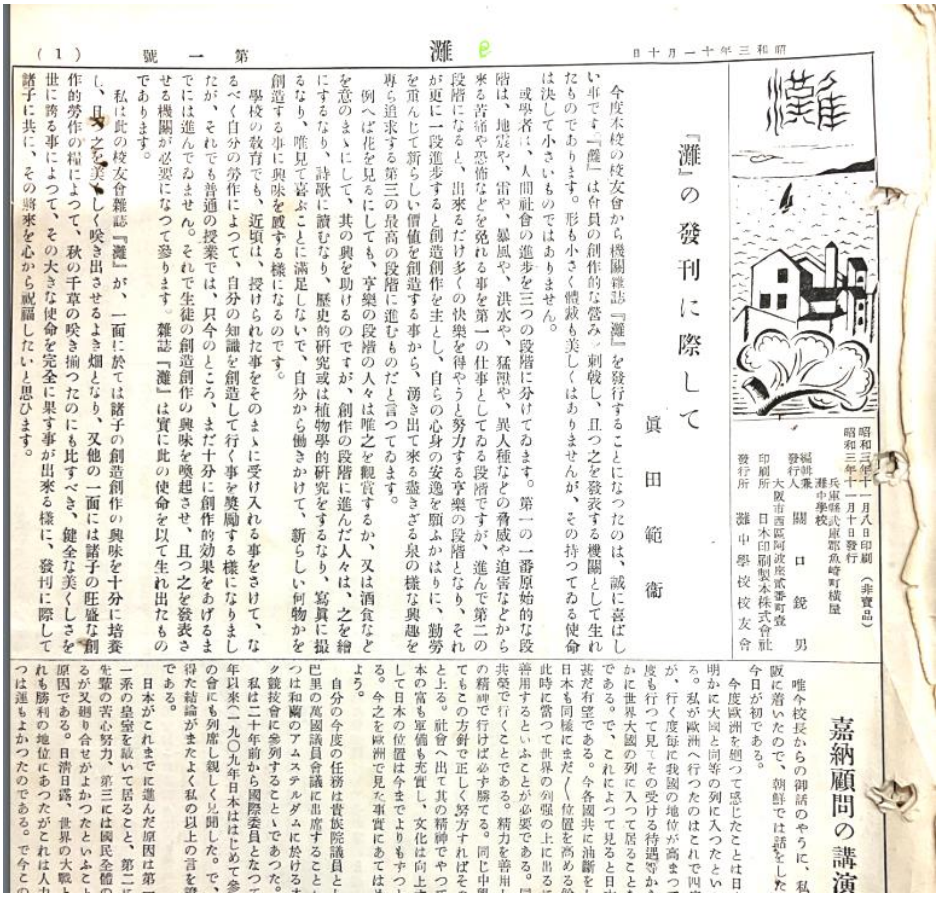
はじめに

第104号より、旧制灘中学校の教育目標や生徒の活動についての史料を紹介する本シリーズを書いているが、第107号からは、初代校長眞田範衛（さなだ・のりえ。1889年～1946年）の教育方針に関わる史料をとりあげてきた。

第107号では眞田の著書『小学校に於ける理化児童実験法』を紹介した。小学校の児童が実際に実験をする授業について詳細に述べたこの書書は、注入主義教育への批判が根底にあったことについて指摘した。

第109号では眞田のもう一つの著書、『誤り易い算術問題とむつかしい算術問題』を紹介した。そして、旧制中学入試に頻出する算術問題について、間違えやすい箇所は問題を解く上での考え方について丁寧に解説したこの著書は、尋常小学校の教科書での勉強しか経験していない読書に対して、「尋常科の教科書を十分に勉強してある人は直ぐこの本で準備しても大丈夫入学試験がうけられると思ふ」と励ましていることについて触れた。この意味から、『誤り易い算術問題とむつかしい算術問題』も注入主義への批判的スタンスが基盤となって書かれているといえる。

第110号では眞田の和歌・唱歌の旺盛な創作活動を紹介し、第111号では眞田校長自ら作詞した校歌と「生徒の歌」を紹介した。本号では、眞田が取り組んできた創作活動と眞田の教育観との関係について示唆する史料として、眞田範衛「『灘』の発刊に際して」（『灘』第1号、1928年11月10日）をとりあげる。



昭和三年十一月十日發行　第一號　（1）　灘　昭和三年十一月八日印刷

『灘』の發刊に際して

眞田範衛

今度本校の校友會から機關雜誌『灘』を發行することになつたのは、誠に喜ばしい事です。『灘』は會員の創作的な營み、刺戟し、且つ之を發表する機關として生れたものであります。形も小さく體裁も美しくはありませんが、その持つてゐる使命は決して小さいものではありません。

或學者は、人間社會の進歩を三つの段階に分けてゐます。第一の一番原始的な段階は、地震や、雷や、暴風や、洪水や、猛獸や、異人種などの脅威や迫害などから來る苦痛や恐怖などを免れる事を第一の仕事としてゐる段階ですが、進んで第二の段階になると、出來るだけ多くの快樂を得やうと努力する享樂の段階となり、それが更に一段進歩すると創造創作を主とし、自らの心身の安逸を顧ふはりに、勤勞を重んじて新らしい價値を創造する事から、湧き出て來る盡きざる泉の樣な興趣を專ら追求する第三の最高の段階に進むものだと言つてゐます。

例へば花を見るにしても、享樂の段階の人々は唯之を觀賞するか、又は酒食などを意のまゝにして、其の興を助けるのですが、創作の段階に進んだ人々は、之を繪にするなり、詩歌に讃むなり、歴史的研究或は植物學的研究をするなり、寫眞に撮るなり、唯見て喜ぶことに滿足しないで、自分から働きかけて、新らしい何物かを創造する事に興味を感ずる樣になるのです。

學校の教育でも、近頃は、授けられた事をそのまゝに受け入れる事をさけて、なるべく自分の勞作によつて、自分の知識を創造して行く事を奬勵する樣になりましたが、それでも普通の授業では、只今のところ、まだ十分に創作的効果をあげるまでには進んでゐません。それで生徒の創造創作の興味を喚起させ、且つ之を發表させる機關が必要になつて參ります。雜誌『灘』は實に此の使命を以て生れ出たものであります。

私は此の校友會雜誌『灘』が、一面に於ては諸子の創造創作の興味を十分に培養し、且つ之を美しく咲き出させるよき畑となり、又他の一面には諸子の旺盛なる創作的勞作の糧によつて、秋の千草の咲き揃つたのにも比すべき、健全な美くしさを世に誇る事によつて、その大きな使命を完全に果す事が出來る樣に、發刊に際して諸子に共に、その將來を心から祝福したいと思ひます。

嘉納顧問の講演

唯今校長からの御話のやうに、私
阪に着いたので、朝鮮では話をした
今日が初めである。
今度歐洲を廻つて感じたことは日
明かに大國と同等の列に入つたい
る。私が歐洲へ行つたのはこれで四
が、行く度毎に我國の地位が高まつ
度も行つて見てその受ける待遇等か
かに世界大國の列に入つて居ること
である。これによつて見ると日
甚だ有望である。今各國共に油斷を
日本も同樣にまだ〳〵位置を高める
此時に當つて世界の列强の上に出る
善用するといふことが必要である。
共榮で行くことである。精力を善用
の精神で行けば必ず勝てる。同じ中
てもこの方針で正しく努力すれば
と上る。社會へ出て其の精神でやつ
本の富も軍備も充實し、文化は向上
して日本の位置は今までよりもずつ
る。今之を歐洲で見た事實にあては
よう。
自分の今度の任務は貴族院議員と
巴里の萬國議員會議に出席すること
つは和蘭のアムステルダムに於ける
ク競技會に參列することであつた。
私は二十年前から國際委員となつ
年以來一九〇九年日本ははじめて參
の會にも列席し親しく見聞した。で
得た結論がまたよく私の以上の言を
である。
日本がこれまでに進んだ原因は第一
一系の皇室を戴いて居ること、第二に
生業の苦心努力、第三には國民全體
るが又纏り合せがよかつたといふこと
原因である。日清日露、世界の大戰
れも勝利の地位にあつたがこれは人
つは運もよかつたのである。で今こ

『灘』第1号（1928 年 11 月 10 日）の紙面

創造創作の奨励

これは、開校の7ヶ月後に創刊された灘中学校の校友会誌『灘』の創刊号に眞田校長が寄稿した巻頭記事である。この記事のなかで眞田は、人間社会の進歩を「原始的な段階」「享楽の段階」「創造創作の段階」に分け、「創造創作の段階」が最高の段階であると述べ、学校教育を「創造創作の段階」にするためには、通常の授業だけでなく、「生徒の創造創作の興味を喚起させ、且つ之を発表させる機関」として校友会誌を重視している。眞田のなかで、注入主義教育へ

の批判と自らも精力的に取り組んできた創作活動が深く結びついていたこと、すなわち、眞田にとって灘中学の教育目標は、嘉納治五郎の「精力善用」「自他共栄」とともに、生徒自身の創造創作、つまり、自主的な文化活動の奨励であったと考えることができるのではないだろうか。

以下、この記事を翻刻する。

『灘』の発刊に際して

眞田　範衛

今度本校の校友会から機関雑誌『灘』を発行することになつたのは、誠に喜ばしい事です。『灘』は会員の創作的な営みを刺戟し、且つ之を発表する機関として生れたものであります。形も小さく体裁も美しくはありませんが、その持つてゐる使命は決して小さいものではありません。

或学者は、人間社会の進歩を三つの段階に分けてゐます。第一の一番原始的な段階は、地震や、雷や、暴風や、洪水や、猛獣や、異人種などの脅威や迫害などから来る苦痛や恐怖などを免れる事を第一の仕事としてゐる段階ですが、進んで第二の段階になると、出来るだけ多くの快楽を得ようと努力する享楽の段階となり、それが更に一段進歩すると創造創作を主とし、自らの心身の安逸を願ふかはりに、勤労を重んじて新らしい価値を創造する事から、湧き出て来る尽きざる泉の様な興趣を専ら追求する第三の最高の段階に進むものだと言つてゐます。

例へば花を見るにしても、享楽の段階の人々は唯之を鑑賞するか、又は酒食などを意のまゝにして、其の興を助けるのですが、創作の段階に進んだ人々は、之を絵にするなり、詩歌に読むなり、歴史的研究或は植物学的研究をするなり、写真に撮るなり、唯見て喜ぶことに満足しないで、自分から働きかけて、新らしい何物かを創造する事に興味を感ずる様になるのです。

学校の教育でも、近頃は、授けられた事をそのまゝに受け入れる事をさけて、なるべく自分の労作によつて、自分の知識を創造して行く事を奨励する様になりましたが、それでも普通の授業では、只今のところ、まだ十分に創作的効果をあげるまでには進んでゐません。それで生徒の創造創作の興味を喚起させ、且つ之を発表させる機関が必要になつて参ります。雑誌『灘』は実に此の使命を以て生れ出たものであります。

私は此の校友会雑誌『灘』が、一面に於いては諸氏の創造創作の興味を十分に培養し、且つ之を美くしく咲き出させるよき畑となり、又他の一面には諸氏の旺盛な創作的労作の糧によつて、秋の千草の咲き揃つたのにも比すべき、健全な美くしさを世に誇る事によつて、その大きな使命を完全に果す事が出来る様に、発刊に際して諸子に共に、その将来を心から祝福したいと思ひます。

次号は、設立運動発起人・曽我豊吉に関する史料を紹介したい。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

東京都八王子市に拠点を有する東京薬科大学では、キャンパス内で生育している植物（花や果実など）から単離した酵母菌や乳酸菌を用いて新たなクラフトビールを、八王子市内に醸造所を持つ高尾ビール株式会社と共同開発している・・といいます。その企画の第5弾として、八王子市特産の伝統野菜「高倉ダイコン」から単離した乳酸菌を使ったサワーエールが、地元・八王子地域の活性化推進策として開発されたのだそうです。肝心な原料となる高倉ダイコンは、八王子市内でも僅か2軒ばかりの農家で、非常に限られた量しか生産されておらず、「幻のダイコン」とも呼ばれているほどの、地元では貴重なダイコンだそうです。ただ東京薬科大学としては、消えつつある伝統野菜の存在を、このクラフトビールを介してみなさんに紹介することで、八王子地域の食文化の継承と発展に少しでもつなげたいという熱いメッセージもこめられていると強調します。（谷本）

酒田孝「高校生が一般質問で地域を動かした　―模擬議会の取り組み―」(『高校生活指導』217号)という実践記録を読んだ。青森県立六戸高校は、学校統合によって2023年3月に閉校したが、同校の生徒たちは2019年から地域の方々といっしょに学校に隣接する公園に大規模なビオトープを作る「さつき沼ビオトープ・プロジェクト」に取り組み、地域とのつながりを深めてきた（なお、閉校後、ビオトーププロジェクトは消滅することなく、NPOに引き継がれた）。

そうした中、2022年1月から、地方議員のMさんのコーディネートによって六戸町議会が六戸高校の生徒による模擬議会を企画し、生徒たちは主権者教育の一環として取り組んだ。

町議会の傍聴、班ごとの質問テーマ決め、議員との打合せ、町民の方々へのヒアリング、質問通告書の作成、再質問（町長などの答弁を受けた後の、質問書によらない質問）準備、2回にわたるリハーサルなどを経て、生徒たちが高水準の質問をする模擬議会が実現し、生徒たちの鋭い質問に町長が答弁に苦慮する場面もあったという。「この模擬議会を通して政治をリアルに学んだと同時に、地方の自治体が抱える課題も深く知ることができた。そして、生徒の提案のいくつかは実際に予算がつき実現することになった。生徒たちの質問と活動は町議会や地域にも大きな影響を及ぼした」という。

意欲的な町議員、主権者教育に取り組む教師、保護者・町民・町長・校長などの理解・協力などの条件が揃えば、高校生は予想以上の力を発揮し、地域の未来によい影響を与えることもできる、ということを感じた。生徒たちを支える大人の存在が重要であり、私自身も何らかの形でそうした大人の役割を果たしたいものだと思った。（冨岡）

会員消息

このたび、東京都文京区では、学童保育の待機児童対策として、タクシーで公立の学童保育施設と区内の小学校間を学童らの送迎で往復する施策を、都内初で行うとしています。保育施設のスタッフもこのタクシーに同乗して、確実に学童保育の児童を送迎することとのことです。ただ、あえてこの試みにもう少し工夫や改善点を挙げるとするならば、学童保育を利用する児童後見人・親族が確実に児童を迎える処（後見人・親族が児童を迎えるのに都合がよい適切な処）までなんとか送迎できないだろうか・・とつい考えてしまいますね。これは都内での一自治体の勇気ある挑戦ですが、各家庭での子育てにともなう障害や手間などを少しでも軽減して行けたら、と心から願うばかりです。（谷本）

2024年1月3日に播磨西国三十三か所巡礼を満願しました。道中、札所の住職・和尚様をはじめ多くの方に支えていただき、何とか巡り終えました。どの住職さん、スタッフさんも親切に対応していただき「温かい気持ち」で巡礼を続けることができました。四国八十八か所・西国三十三か所巡礼とは異なり、地域に密着した巡礼の旅ができる一方、認知度は低く、巡礼に参加される方も少数だとお聞きしました。何とかお力になれないかと思い、満願後、播磨西国巡礼を紹介するサイトを立ち上げました。ご笑覧いただき、播磨西国巡礼を知っていただくきっかけになれば望外の喜びです。（八田）

本務校の短大（3年制）が、プラス1年の専攻科を設置する準備を行っています。「独立行政法人大学評価・学位授与機構の認定を受けた専攻科を修了した場合は、同機構の審査を経た後、4年制大学卒業に相当する学士の学位を得ることもできます（文部科学省）」。入学志願者の減少で短大をとりまく状況は危機的です。専攻科設置も、短大が生き残る術かもしれません。（山本剛）

着任して約一ヶ月となりますが、まだまだ慣れないことばかりといった感じの毎日です。特に授業ですが、これまで非常勤としていくつかの大学で講義を持ってきましたが、専任として授業を担当するのはまた違った感覚となり、授業準備にもかなり労力をかけております。（担当する授業も「教育制度」「教育課程論」と、自身の専門からは少し離れておりますので、現在勉強中です）なんとか徐々に慣れていけるようにしたいところです。（雨宮）

「新札記念　津田梅子シンポジウム」に行ってきました。令和6年7月3日、津田梅子の肖像を描いた五千円札が発行されます。シンポジウムは、去る4月13日（土）、渋谷区表参道にある東京ウィメンズプラザホールで行われました。主催は、ウィメンズコミュニティ。第一部は、「女性教育の先駆者　津田梅子の軌跡・パネルディスカッション」。第二部は、「小説津田梅子とピアノと朗読の集い」。

パネリストは、津田梅子の父津田仙の曽孫で、津田仙の研究者の津田道夫氏、梅子と一緒に留学した山川捨松の曽孫の久野明子氏、津田塾大学学長の髙橋裕子氏、（一財）新渡戸基金理事長の藤井茂氏の4名でした。ファシリテーターは、ウィメンズコミュニティ代表で、『小説津田梅子ハドソン河の約束」（2022年刊行）の著者こだまひろこ氏。

津田道夫氏は、「津田家の環境と子育て」として、津田仙や母親の初のこと、梅子がわずか6歳で米国留学する時の状況などについて語り、次いで久野明子氏が「梅子との友情と『バッサー大学』」として、アメリカ留学時代の捨松や梅子らの様子について語りました。髙橋裕子学長は、「英国視察の津田梅子『女子英学塾』の発展」として、梅子が塾開校を決意する経緯などについて語り、藤井茂氏は「女子英学塾の伯父新渡戸稲造」として、塾開校時の協力者の一人となり、塾の特別講座で『武士道』などを講じた新渡戸稲造と塾とのかかわりなどについて語りました。このようにして、ファシリテーターのこだまひろこ氏の進行により、徐々に梅子の軌跡が明らかにされていきました。

途中、米国フィラデルフィア在住のRexcel Group CEOで、フィラデルフィア日米協会副理事長の穎川廉氏が、あちらは真夜中にもかかわらずZOOM参加しました。「フィラデルフィアの津田梅子」として、塾運営にあたりフィラデルフィアのプロテスタント系フレンド派の多額の支援を受けたことなどについて語ったり、現在のブリンマー大学を紹介したりして、シンポジウムに国際色を添えました。

それぞれパネリストの話はおもしろく、初めて知ることも多くありました。最後に髙橋学長が、新五千円札の肖像に梅子が選ばれたことについて、“梅子は、2回目の自らの意志でブリンマー大学に留学した時、自分と同じように日本人女性が高等教育を受けられるようにと「日本婦人米国奨学金」の設立に奔走しました。後に第2代塾長となる星野あいもその恩恵を受けました。留学仲間で、塾の顧問・社団法人の理事などで協力した山川捨松や、梅子を精神的に支え、社団法人の社員として協力した永井繁子、捨松のホストファミリーで、塾開校時の2年間無報酬で手伝ったアリス・ベーコン、アリスと入れ違いに来日し、生涯塾のために無報酬で貢献したアナ・ハーツホンら、梅子と塾を支えた人々の代表として、梅子が新札の肖像に選ばれたのだと思います。” と述べたことがとても印象に残りました。

今回のシンポジウムに参加して、私は改めて、最年少だった梅子が、女子英学塾を開き、女子の教員養成に尽力して、日本政府が派遣した留学生としての責務を果たしただけでなく、「日本婦人米国奨学金」の設立が非常に大きな意味を持つことに気づきました。髙橋学長は、梅子を四字の言葉で表すと「一粒の麦」だと。梅子が蒔いた一粒の種、すなわち「日本婦人米国奨学金」で留学した女性たちは、第1号松田道（同志社女子専門学校校長）、第2号河井道（恵泉女学園創立）、第3号鈴木歌子（女子学習院教授）、第4号星野あい（第2代女子英学塾塾長）、第5号藤田たき（津田塾大学学長）など、帰国後、いずれも女子高等教育に貢献しています。このように梅子が次世代を育てるための下地を作ったこと、これも一つのSDGsと言えるのではないでしょうか。（長本裕子）

研究・教員と並行して続けている趣味の話になってしまいますが、大学生のころから通っている京都シティフィル合唱団の第46回演奏会が来たる6月23日(日）に京都コンサートホール（大ホール）で開催されます。 コロナ禍での中断もありましたが、一昨年、昨年に続き、京都コンサートホールでの演奏会に合唱で出演できることに感謝しています。

曲目は、バッハ作曲「ヨハネ受難曲」です。劇団四季のミュージカル公演「ジーザス・クライスト＝スーパースター」が話題になっていますが、バッハの「ヨハネ受難曲」も、イエス＝キリストの受難を扱ったクラシック界の名曲だと思います。補充練習を含めれば月9回ほどの練習を1年間以上重ねなることができるのは、アマチュアの強みかもしれませんので、素人ですが、その強みを活かして曲の魅力が少しでもお伝えしたいものだと思っています。次頁にチラシを貼っておきます。関西にお住まいの方、もしよろしければ聴きにいらしてください。

もうひとつ、大切なお知らせがあります。長野県松本市にある旧制高等学校記念館の第28回夏期教育セミナーの詳細がだんだん決まってきました。「伝統校の自治」を全体テーマとして、8月31日には井上義和氏（帝京大学・教育社会学）の基調公演と加藤善子氏（信州大学・教育社会学）の指定討論があり、9月1日には森いづみ氏（長野県立図書館）、田中智子氏（神奈川大学）、猪股大輝（4月から東洋大学）の研究発表があります。夏の松本は大人気で宿泊先の予約がなかなか大変ですが（恐縮ですが、お早めの予約をお願いします）、もしご興味ありましたらぜひご参加ください。松本でお目にかかれるのを楽しみにしています。（冨岡）

京都シティーフィル合唱団　第46回演奏会

—群衆の中に私がいる—

J.S.バッハ ヨハネ受難曲

Johann Sebastian Bach Johannes-Passion BWV245

2024年6月23日（日）

開場13:15　開演14:00

京都コンサートホール 大ホール

地下鉄烏丸線北山駅下車1番または3番出口南へ徒歩5分

エヴァンゲリスト 北村敏則
ソプラノ 浦田恵子
アルト 栗木充代
テノール 竹岡大志
バス（イエス） 萩原次己
バス（ペテロ、ピラト） 片桐直樹
オルガン 堀江光一

管弦楽
テレマン室内オーケストラ

合唱
京都シティーフィル合唱団

指揮 明石好中

前売り券（全席指定）　S席 5,000円（前売指定）　A席 4,000円（前売指定）　B席 3,000円（前売指定）

前売り券取り扱い

京都コンサートホール・チケットカウンター（オンラインチケット購入、https://kyotoconcerthall.org/）	075-711-3231
アマデウス音楽事務所 京都シティーフィル合唱団　email：info@cityphil.com	075-314-1928

※未就学児のご入場はご遠慮ください。
※当日ホールに1才から未就学児のための保育室をご用意いたします。必ず6月9日（日）までに下記問い合わせ先にご予約ください。当日のお申込みはお受けできません。なお、人数に限りがありますので先着順とさせて頂きます。

お問い合わせ ｜ アマデウス音楽事務所 075-314-1928　合唱団HP https://cityphil.com/

主催：京都シティーフィル合唱団　後援：京都府・京都市　協賛：アマデウス音楽協会

（京都シティフィル合唱団ホームページ https://cityphil.com/ より）

第28回夏期教育セミナー
「伝統校の自治」開催のお知らせ

旧制高等学校記念館では、毎年夏に旧制高校卒業生や市民、研究者がともに学ぶ「夏期教育セミナー」を開催しています。近年は軸となるテーマを設定し、講演や特別イベント等を通じて、学び考える機会としています。

次回、第28回の夏期教育セミナーは、「伝統校の自治」をテーマとし、研究発表を含めた2日間の日程で開催します。

基調講演には、2023年に『深志の自治―地方公立伝統校の危機と挑戦』（信濃毎日新聞社）を編著者として上梓した、井上義和先生（帝京大学教授）をお招きします。旧制中学や旧制高等女学校からの歴史を有する「伝統校」には、独自の文化や自治が息づいています。これらの「伝統」に潜んでいる機能や課題を可視化することによって、今後の教育について考えていく機会として企画しました。

≪開催日時と主な内容≫

日時：　8月31日（土）、9月1日（日）

場所：　あがたの森文化会館（旧松本高等学校）講堂ほか

―詳細は、次号（7月31日発行）の「記念館だより」などでお知らせします。

■基調講演（8月31日（土）13：00～）

井上義和先生（帝京大学教授、教育社会学）

■指定討論（8月31日（土）14：35～）

加藤善子先生（信州大学教授、教育社会学）

■研究発表（9月1日（日）9：30～12:30）

森いづみ氏（長野県立図書館長）、田中智子氏（神奈川大学）、猪股大輝氏（東京大学大学院）の3名を予定。

≪参加申し込み≫

・参加費無料。

・参加には事前申し込みが必要になります（お名前、連絡先など）。

参加ご希望の方は、旧制高等学校記念館まで、メールまたは電話（連絡先は8ページに記載）によりご連絡をお願いいたします。

皆さまのご参加をお待ちしております。

（『記念館だより』第91号より）

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。